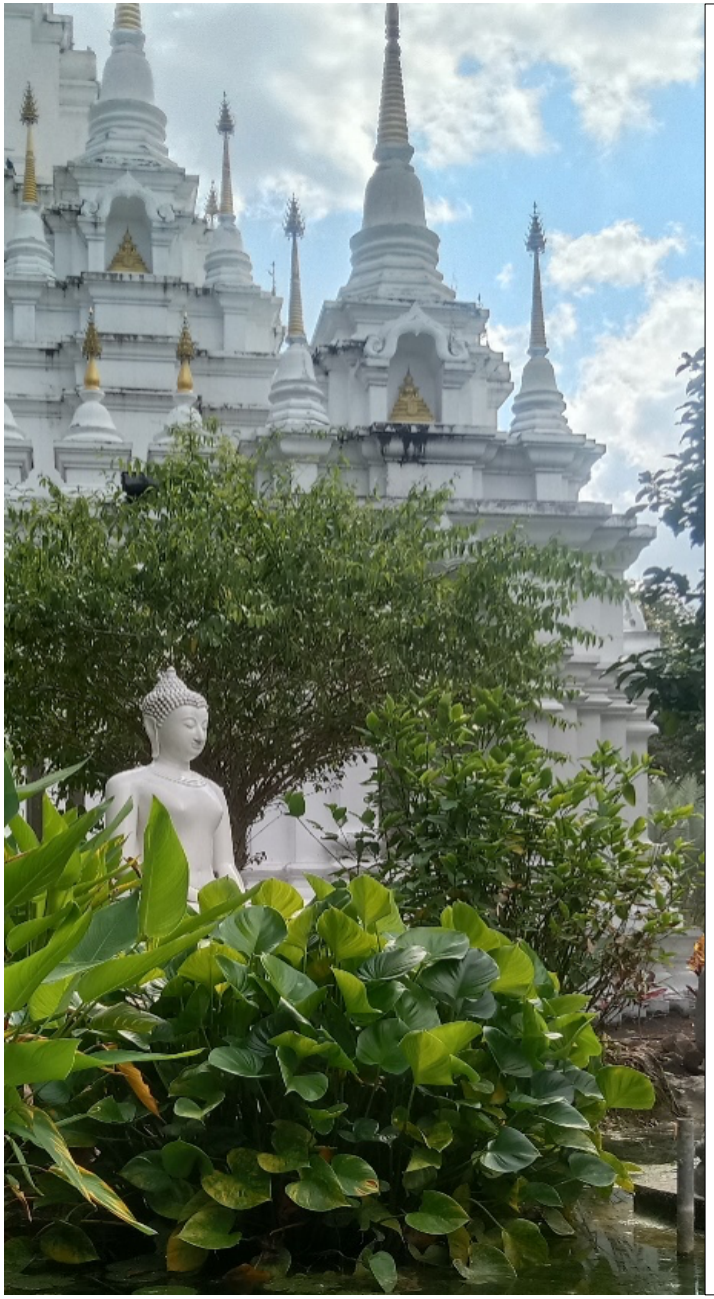
PABBAJJĀ – UPASAMPADĀ



出家(pabbajjā)ー黄衣をまとい家なき状態に入ること

仏教の本来の目的は出家者となって修行を積み、生存の苦しみを取り除くことにある。悟りへの修行を徹底させるために、修行者はあらゆる生産活動を放棄し、在家者の布施にすがって生計を立てなければならない。そのようなきわどい状況に身を置く出家者にこそ在家者達は敬意をもって布施するのである。

仏教は本来このように厳密に区別される出家世界と在家世界の二重構造から成り立っている。

佐々木閑『出家とは何か』p.36

出家(pabbajjā) ー 出離(nekkhamma)

テーラワーダ仏教国、タイでは現在でも公務員であれば三か月間の出家休暇が与えられている。そこには成人男子の通過儀礼といった要素もあり、同様の理由で雨季の間に数か月間の出家を望む者もいる。

幼少期にある一時期、男児を沙弥出家させる親もいて、求道としての出家よりも習俗としての仏教文化の伝承といった面も見受けられる。

それらの多くの者は還俗して一般の生活に戻ることがいわば前提のようになっているが、一方に完全な出家となる出離(nekkhamma)をめざし、世俗の生活を捨てて求道の生き方を求める者もいることで、比丘サンガの内部もまた二重構造になっているといえる。

しかし、個々の事情や背景がどうであろうが、パーリ律蔵に順じて行われる出家 ー 受具足戒の儀式様式は同じであり、そこに区別や差別はない。

たとえ、一時的なものであっても、そこに聖なる営みとしての出離、すなわち仏教の要諦を見る文化が形成されているのである。

Phra Mahāpungnyō